

今年、毛沢東により「プロレタリア文化大革命」(文革)が発動されて50年である。人民公社化運動、「大躍進」政策の失敗、文革の過程で数千万人の犠牲者を出しながら、これを批判する者を次々と粛清しつづけた「緊急冒進」の独裁者が毛沢東である。

大衆と結びついた運動の恐怖

冒進を諷める劉少奇や鄧小平らの「実権派」には、中国に資本主義をもたらす「走資派」のレッテルを貼り、無数の紅衛兵の動員により彼らを打倒し、みずから超越的な独裁者に仕立てた。1966年に始まり、その後10年にわたって中国を狂気に巻き込んだ指導者が毛沢東であった。

現実を無視した政策の惨たる帰結が犠牲者の山であった。そのゆえに権力に陰りが生じるや、毛沢東は大衆を動員し批判者を「階級敵」として葬りながら観念的な極左路線を追求した。

狂気の演出者は毛沢東であったが、舞台の上で舞踏(武闘)を演じたのは大衆である。共産革命が成ってなお貧困で無告の民は、自

文革50年 狂気は過去のものか

分の周辺の小さな権力者、時に遠い大きな権力者を「造反有理」のスローガンを掲げて追いつめ鬱屈と怨恨を晴らしたのである。「黄色い大地」によって世界の映画界に登場した奇才、陳凱歌は著書『私の紅衛兵時代』の中で、自らの体験についてこう語っている。

「私は暴力の快感を知った。それは、しばし恐怖と恥辱を忘れさせる。満たされずにいた虚栄心と気づかずにいた権力への幻想が、底の浅い盆に水をあげるように、あつという間にあふれ出た。6歳のとき、ブドウ棚の下にしゃがんで死んでいく小鳥を眺めたとき、私の心に植えられた種が、とうとう実を結んだのだ」

億単位での若者を動員しての狂気である。狂気は狂気であるがゆえに、大衆運動は次第に四方に分裂して相互の闘争自体が自己目的化していった。年老い衰えつつあった毛沢東の権威にしがみつき権

正論



拓殖大学学事顧問 渡辺 利夫

勢を振るった「四人組」が文革小組なるものをつくって権力を奪取したものの、ついにはこれが自壊して文革は終焉した。絶対的権力者が国家統治機構を破壊し、大衆という巨大規模の御しがたい存在と直接結びついて権力の維持・拡大を図ろうという運動の空恐ろしさ、これ以上もなく確かに証した歴史の実験が文革であった。

現代中国に盡く不気味な様相

文革収束後の指導者が鄧小平である。文革で痛めつけられながら

しなやかに復権を果たした鄧小平の主導により、81年6月、党は「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」を採択し、文革とは極左的な誤りから発生した内乱であり、責任者は毛沢東だと総括した。鄧小平は文革の収束後ほどなくして、共産党の絶対的権力はこれを手放さない決意を示す一方で、中国を改革・開放路線に乗せ、高成長への帳を開いた。

そして成長こそが共産党独裁の正統性を保障する根拠であると、社会主義市場経済なる曖昧な

観念を操作して、大衆の支持を得つつ独裁をつづけるという妙手に打って出たのである。

あの狂気の文革があつてこそその市場経済化であり、現在につづく中国の成長と膨張である。ならば、文革は中国にとって完全に過去のものとなったのであろうか。大衆を衝き動かす情念の社会から中国は脱却できたのであろうか。そうはいいい切れない不気味な様相が中国社会に盡き始めている。

文革10年の中国は圧倒的な農村社会であったが、現在の中国は都市社会である。都市就業の拡大に寄与したものは、貧困の農村に戸籍を残しながら都市で居住・労働する農民工であり、彼らが都市の貧困下層民を広範に形づくる。現状に不満を募らせる大衆が都市に凝集しているのである。

められ、央企の上納利潤が党を支える。央企は強固な利益共同体となつて、貧困都市住民の怨嗟の対象である。多くの地方政府も傘下の国有企業、金融機関、開発業者から成るこれも強固な利益共同体として大衆との断絶は深い。

都市農村間とはより都市内部の所得分配の高い不平等がさらに拡大をつづけている。大地主や買弁資本家はもういない。共産党独裁下で新たに生まれた利権構造に対する敵意にも似た大衆の反感情が、狂気となつて共産党独裁に刃向かう文革的リスクは中国からなお消え去つてはいない。

中国に民主主義は存在しないが、一旦緩急あらば政権を吹き飛ばす怨嗟と復讐のマグマはありありと存在する。習近平氏は大衆を信頼しているのではない。恐れているのである。氏が「中華民族の偉大なる復興」をスローガンに民族主義的な、反腐敗を叫んで大衆迎合的な手段に繋ぐ打つて出ているのも、ひとたび動き出せば收拾不能な大衆運動という文革的リスクへの恐怖のゆえなのであろう。

(わたなべ としお)